

古代ギリシア語はトーン言語か ～現代日本語諸方言との比較を通じて～

京都大学大学院 齋藤有哉 (punto.nazca@gmail.com)

古代ギリシア語（主にコイネーを対象とする）は、紀元前3世紀頃に現在のギリシア共和国領域および東地中海域の広くで通用した言語である。この言語のプロソディ実現は1音韻語のうちで1モーラが高ピッチとして卓立する、すなわち現代日本語京阪式アクセント方言における低起式起伏型のようなものであったと推定される。

本研究では、日本語諸方言などの研究から単語レベルの声調を認める立場を採る早田(1997)などの研究を参考に、従来（早田を含め）「ピッチアクセント言語」とされてきた古代ギリシア語のワード・プロソディについて、少なくとも部分的には「トーン言語」であるとして認めることが出来ることを示す。

早田によるアクセントとトーンの定義は以下である。（体裁は変更した。）

- (1) アクセント…音韻単位のなかで「どこにあるか」が弁別的
トーン…その音韻単位が「どの形をとるか」が弁別的

そして、その例として、現代日本語鹿児島方言は2種類の語声調方言、東京方言は動詞類においては語声調、名詞などはアクセントをもつものとし、京阪式方言はいわゆる式に当たるものをトーンとみなし、アクセントとトーンの複合体系であるとする。

このような立場を基本的に認めるとき、古代ギリシア語は少なくとも共時的にはトーン言語であると言えよう。以下、ギリシア語のプロソディ・パターンである。

- (2) oxytone ××× paroxytone ××× proparoxytone ×××
perispomenon ×△ properispomenon △×

以上のピッチパターンは実際には母音の長短によってさらに多くのパターンをなすが、形態的には極めて偏った分布を持つ。これはちょうど早田が東京方言に認めるような体系であると解される。すなわち、ギリシア語において定動詞がほぼすべて Recessive Accent という単一のアクセント語類に属するが、これは常に決まったトーンパターンをとるということに言い換えられる。以下の3種類のトーンパターンを設定する。

- (3) A: [○]○○(○) -3モーラ高
 B: [○]○(○) -2モーラ高
 C: ○○○(l)○ なし []はHピッチの実現、()は韻律外を表す

このうち、定動詞はA型だと考えられる。名詞類については現在調査中のものも含め、おおむねトーンないし、接辞にトーンを認め結合規則を立てることで処理可能である。ただし、アクセントを認める必要がありそうなものもある。たとえば、印欧語に汎く同源語をもつ親族名詞などに、トーンとしての解釈がおそらく不可能な形が頻出する。しかしながら、これはむしろギリシア語の内部の革新としてアクセントの弁別性が薄れる方向へ動いていたとすれば自然に理解可能である。

Reference

早田輝洋. 1997. アクセントとトーン. 『アジア・アフリカ文法研究』26. 東京外大.